

あさぬま こういち
浅沼 弘一

電機連合・書記長

心のバランス

日頃、美術館とか博物館が好きで出張などで地方に出かけた時に隙あらば行っている。

都会の大きな美術館もよいが、地方にある小さな美術館も捨てたもんじゃない。都会にある大きな美術館で、遠路はるばるお越しいただいたありがたい文物を拝見させていただくのも悪くはない。が、地方の小さな美術館は、その土地にゆかりのある人の作品が簡素に展示されているというのが常で（もうちょっとちゃんとしようよというケースもままあるが）、ゴテゴテ感がなく居心地がよい。

と、偉そうなことを言っているが、絵の歴史とか作風がどおだかなんて、てんで分からないし、画家の知識だって教科書レベル以下であるが、時々妙に感動する絵に出合い総毛立つことがある。

これまで出会った美術館の中でも、秋田にある美術館はまさに逸品ぞろいで訪れるたびに豊かな気持ちにさせてくれる。この地にゆかりの藤田嗣治の作品を相当数収蔵しているが、中でも横20m超、縦3m超の巨大な壁

画はまさに総毛立つこと間違いなし。最初に見た時は茫然と立ち尽くしてしまった。それだけでなく美術図鑑に載っているような有名な作品も無造作に、それも大量に展示してあるのである。そんな美術館であるが、展示はあくまで質素で図録さえ売っていない（さらに残念なのは、秋田の地元の人もあまりこの美術館の存在を知らないことである）。

美術館だけでなく博物館も地方でよいものに出会うことが多い。郷土資料館という名前がついているようなところには、よい博物館の匂いがする。その土地がどうゆう地勢にあり、どういう歴史的な流れで発展し（あるいは衰退し）、今があるのかという疑問に的確にこたえてくれて、ほとんど期待を裏切られることはない。

これまでおじゃました中でも、酒田にある資料館は期待を裏切らない博物館の典型である。最上川の水運で発展した酒田市の成り立ちや、日本海舟運の寄港地として発展した歴史（今でも続く芸妓の歴史も含め）など、ど



のように酒田市が発展してきて今日あるのかという疑問に的確にこたえてくれる。さらにこの資料館のよいのは、酒田といえば大火という言葉が頭に浮かぶが、その大火に関する資料もしっかり展示してあることである。わが町の災害ということからいえばあまり堂々と展示するものでもないということになるかもしれないが、この資料館では、出火から鎮火まで、時間を追って詳しく解説された資料が展示されており、当時の様子が手に取るようにわかり、その丁寧さに感動さえ覚えるのである（開館時間より相当早かったにもかかわらず早く入れてくれたというのも好印象につながっていると思うが）。

ワーク・ライフ・バランスというどうしても時間のバランスに話が行くことが多くなるが、それだけでなく心のバランスも必要であると思っている。私の道草にあえて意義を与える（言い訳をする）とすれば、この心のバランスに行きつく。仕事の忙しさに翻弄されていると、どうしても心の軸がずれたままになってしまうように思う。パソコンの画面

だって、ずっと同じ画像を表示していると、画面が焼きついてしまって表示が変になってしまう。仕事とは直接には関係のない道草を食うのは、自己防衛的に心のバランスをとって、ギアをニュートラルに戻そうとしているのかもしれない。忙しくてそんなことする暇ないと怒られそうだけれども、それは何より自分のためであるし、大きく考えると仕事のためということにもなる。

さて、新しい年が始まった。どこかの本で読んだが、十二支の動物は当時字が読めない民衆が十二支を覚えやすいように割り当てたもので、本来の意味は種を植えて育て収穫し倉庫に蓄えるというプロセスを表しているらしい。今年は卯年。子から数えて4番目であり、十二支を一年間のプロジェクトと考えると第2四半期に入ったということになる。準備完了いよいよ本腰入れて本題に入るかという時期であろうか。我々にとっては…。

ともかく、今年はどんな発見と感動があるか、一年間わくわくしながら楽しみたい。